北海道の印刷出版文化情報誌
季刊アイワード
Quarterly i WORD
クォータリーアイワード
2022年4月
第13号（通巻359号）

THIS IS MECENAT 2021

特集

白石命名から150年　郷土の歴史を伝える
『白石ものがたり』が完成 白石区ふるさと会

シリーズ「北海道の天然記念物」❺ …… ホベツアラキリュウ化石〔むかわ町〕

ほっかいどうの本 ……『消えた「四島返還」　安倍政権　日ロ交渉2800日を追う』…北海道新聞社
『北海道の縄文文化　こころと暮らし』……亜璃西社
『画文集 四季のきせき』……共同文化社

特集

白石命名から150年 郷土の歴史を伝える

『白石ものがたり』が完成

白石区ふるさと会

札幌市白石区（しろいし）の歩みを克明につづった記録誌『白石ものがたり―前史と白石150年の記録―』（発行：白石区ふるさと会）全4分冊が、2022年1月に完成しました。B5判フルカラーで総ページ数は約1,400ページの大冊です。制作は株式会社アイワードが担当し、2年がかりで集めた一次史料は1,034件、史料写真は8,522点に上り、記録誌の編さん作業と並行して、これら史料のデータ化にも取り組みました。同会会長の武藤征一さんと、編集部会長を務めた山中忠典さんから、記録誌に託した思いなどを伺いました。

（文と写真・片山健一　取材日2022年3月15日）

白石区の新たな宝物になった一次史料集成を前にした武藤会長（左）と山中部会長（右）

一次史料に当たり 丹念に史実を掘り起こす

白石区ふるさと会は、2018年の定期総会で、旧暦の明治4年11月25日（新暦の1872年1月5日）にモチキサツフが「白石村」と名付けられてから150年となる2020年に向け、記念事業の一つとして記録誌の発行を企画しました。白石に関する歴史書には、白石村が作成した『白石村史』（1921年）、期成会組織がまとめた『白石発展百年史』（1970年）などがありましたが、集められた史料の多くは二次史料や三次史料に相当するもので、正確性の担保が困難な記述も見られています。

また、同会は、白石区役所の移転に伴い2016年11月に完成した白石区複合庁舎内に、本州からの移住が始まった明治初期から、白石村が札幌市と合併した1950年までの記録を展示する「白石郷土館」を開設しましたが、制作した展示用パネルの記述に、正確性や信頼性に欠けるものや誤りと思われる箇所が見つかっています。

「区民の方々から寄付金を集めて白石郷土館を開設したのに、必ずしも正鵠を射ていない歴史を伝えることになると気付いてからは、後ろめたさに悩んできておりました」と武藤さんは打ち明けます。何とかパネルを訂正したいと思案の末に、そのためには確かな一次史料を集める必要があるとの気付きを得たようです。

そこで、記録誌を編さんする際の、調査・取材に当たっては可能な限り一次史料を探し当て、文献史学の視点に立って史料の価値を判定して原稿を作成する方法にすれば、この手法に準じることで郷土館のパネ

完成した
『札幌市白石区一次史料集成』
A4判　4,800ページ

および発行した
〈白石ものがたり〉
―前史と白石150年の記録―
The story of Sapporo Shiroishi

1	その歴史と前史	B5判	720ページ
2	目で見る歴史と年表	B5判	304ページ
3	ひと・まち・くらし	B5判	256ページ
4	諸行事の記録	B5判	144ページ

ルも修正できると武藤さんは考えました。

史料収集は、国立公文書館、北海道立文書館、札幌市公文書館などに保管されているものを調べるとともに、宮城県白石市や札幌市白石区役所などの関係機関にも協力を仰ぐ必要もあって、膨大な手間と時間が掛かる作業となりました。

編さん作業は長丁場となることを想定し、要となる編集部会長は「連合町内会長や編集部会のメンバーの合意形成を円滑に取りまとめる力にたけており、区役所などとの折衝もこなしていただける人物」（武藤会長）として、山中さんに依頼しました。

『白石ものがたり1　その歴史と前史』は一次史料に語らせる記述形式

『白石ものがたり1　その歴史と前史』は、白石村命名までの経緯や村づくり、戦中戦後のまちの様子、札幌市との合併、1972年に政令指定都市となり白石区が誕生するまでの歩みのほか、アイヌ民族の歴史を織り交ぜながら、想像や感想を可能な限り排除し、一次史料に基づくことを基調として詳述に努めています。

北海道札幌郡に白石村が誕生したいきさつについては、1868年（明治元）年9月15日、仙台本藩が戊辰戦争に降伏し、仙台藩は領地の仙南と仙北一帯が召し上げとなる中で、62万石が28万石に、同年10月9日、片倉氏は白河口総督府へ白石城を明け渡し、その後に全領地と城下武家屋敷の召し上げを受けて玄米55石の収入へと没落していったことから始まります。

その後開拓使貫属となった片倉家の元家臣たちとその家族は、北海道へ移り、到着後、二手に分かれての入植、つまり、その一団が月寒村の外れの豊平川右岸「モチキサツフ」と呼ばれていた一帯に仮小屋を並べ造りました。岩村通俊開拓使判官は、この地を「白石村」と名付けました。

発展の歩みを克明に

「白石村は農業本位」と言われたほど、札幌近郊有数のコメの産地となるまでの記録や、現在の国道12号に当たる道路の整備を軸にした地域づくり、白石発展のもう一つの礎となった鉄道についても詳しく記しています。戦時下や終戦直後の白石村の様子も、一次史料としての文献や写真、証言記録を交え、紙幅を割いて紹介しています。

終戦から5年後の1950年7月1日に白石村は札幌市と合併しました。当時は単独で町制に移行する案、札幌市と村の一部だけを合併する案も検討されており、その議論の経過などを詳しくたどっています。

札幌市編入後は、土地区画整理事業などによって白石の農地がどんどん宅地化され、昭和30年代に起こった市営住宅の建設ラッシュや団地開発が加速していった過程を記録誌は記しています。

白石村命名のはるか前の旧石器時代から当地で暮らす人々の生活ぶりを可能な限り盛り込んでいます。考古学の視点で書き下ろした「一万年以上続いてきた札幌と東北地方との交流と移住」という巻末解説を詳しく記しています。また、2019年制定の「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」の趣旨などを踏まえ、公益財団法人アイヌ民族文化財団が発行した中学生用の社会科副読本『アイヌ民族：歴史と現在―未来を共に生きるために―』を合本するとともに、札幌アイヌ協会による寄稿文などを掲載しています。

札幌市アイヌ施策推進委員会委員長の松久三四彦北海道大学名誉教授は、『白石ものがたり』について「質においてこれだけ深く、量においてこれほど大きく、一地域において、その郷土史をまとめたものは、知りません」と同時に、「北海道の

歴史を振り返るとき、先住民族であるアイヌの人々の歴史を抜きに考えることはできません」と挨拶文に示されています。加えて「この点を重視していることが強く感じられます」との感想を寄せています。

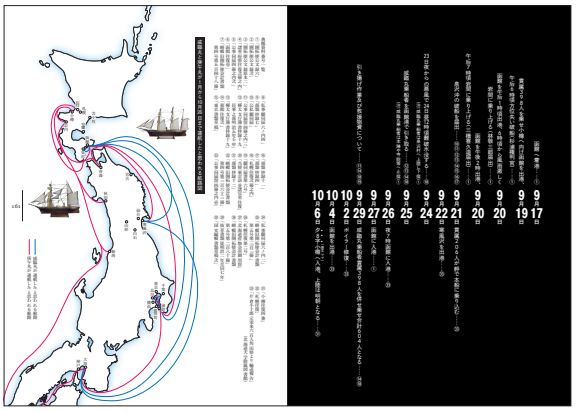
歴史の見える化にも挑戦

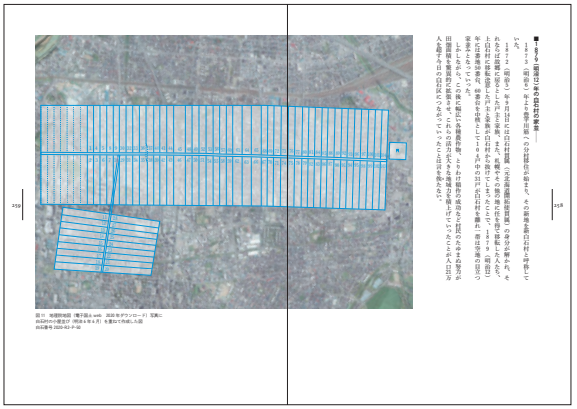
本書では、文字だけでは、分かりにくくなる歴史の見える化にも挑戦しています。

「戊辰戦争と白石城と白石」の史料解説では、北海道移住のきっかけとなった東北での戊辰戦争について、日付の記述がある史料と文献を時系列に整理し、白石城（片倉家）側の視点でドキュメントをまとめています。さらに、片倉家元家臣たちが北海道に渡るため乗船した「咸臨丸」と「庚午丸」の建造の経緯や運行記録を収録するとともに、両船の航路図を作成して、多難な航海を浮き彫りにする試みを行っています。

また、建設業を営み、技術士（上下水道部門）と一級建築士の資格を持つ武藤さんは、開拓使貫属団移住の村づくりの工程を独自に分析をしました。最初の住居となる小屋掛は、4期に分けて施工されたことを解明し、その建設順、区画された土地の位置や形状を現在の航空写真に重ねて図示し、村づくりの過程をつまびらかにしています。

このように歴史を新たに検証できたことについて、武藤さんは「白石区にとって幸運だったのは、元武士たちが多数移住してきた中で文書を残す習慣があったこと、移住地が開拓使の本府に近い土地で、開拓使での記録が豊富だったことがあり、さらに、白石村から宮城県白石に送った書簡なども大量に保存されていたことでした」と話しています。





上の誌面：「歴史の見える化」として航路図を作成しています。
下の誌面：最新の航空写真に白石村の小屋の並びを再現しています。

『白石ものがたり2　目で見る歴史と年表』豊富な写真でつづる記録と総年表

『白石ものがたり2　目で見る歴史と年表』は、1972年4月の札幌市政令指定都市移行に伴い誕生した白石区の出来事やイベントの様子を、時系列に、テーマ別に写真を中心として、白石区民の生き生きとした取り組みや足跡を拾い上げています。

白石区役所の開設（1972年）や白石サイクリングロードの完成（1974年）、地下鉄東西線白石～厚別の建設（1978～1982年）、札幌花き地方卸売市場の開設（1981年）、白石分区による厚別区誕生（1989年）、平和大橋の開通（2004年）、白石区複合庁舎の竣工（2016年）などの供用開始を取り上げています。

区民の郷土意識と相互の連帯意識を高め、白石区を「人情味あふれる素晴らしいまち」にしようと1976年3月に発足した白石区ふるさと会の活動の歩みを振り返っています。

巻末には、明治から令和にかけての年表を掲載しています。

『目で見る歴史と年表』では区民には懐かしい写真を豊富に掲載しています。

『白石ものがたり3　ひと・まち・くらし』地域に眠るエピソードを掘り起こす取材記録

『白石ものがたり3　ひと・まち・くらし』では、白石の発展に深く関わってきた6つの物語を通じて、地域の人々の営みや四季の変化などに焦点を当て、約200人への取材を通して編集されています。

1880年代に白石でレンガを製造した鈴木煉瓦製造場の歴史や、1926年に白石村を通る3本目の

鉄路、北海道鉄道の開通により、東札幌、月寒、大谷地、上野幌の4駅が村内に開業して物流が向上し、多くの工場が立地したことなどを紹介しています。

商店街では、「将来、狸小路のような繁華街にする」という目標を掲げ、1955年ごろに畑の中に造られた本郷商店街をはじめ、白石区内の各地区の商店街の成り立ちや現在の商店街を支える人々の姿を生き生きと伝えています。

教育関係では、入植後、百日余りの1872年3月に「善俗堂」が開設され、1881年4月の学制改革で「公立白石学校」となり、現在の白石小学校に継承されたという変遷を紹介しているほか、教育に力を入れる地域性を表す事例として、1970年に始まり、50年を超えて続く「白石区中学生の主張発表会」の歴代参加者の感想や、地元の企業や施設で小中学生が就労体験する「白石でっち奉公」の様子などを掲載しています。

また、JR千歳線と函館本線の分岐部に設けられた札幌貨物ターミナル駅を中核に、高速道路など交通アクセスに優れた流通センター地区（大谷地流通業務団地）の物流拠点としての位置付けや将来展望について、団地内企業を取材し詳細にその機能を記述しています。

『ひと・まち・くらし』では白石が物流拠点として成長したエピソードなどを紹介しています。

の保阪正康さんの記念講演などを収録しています。

また、白石城主片倉家の縁から、宮城県白石市との交流を長く続け、白石市の片倉鉄砲隊に白石区民有志が2014年に入隊し、2016年からは分隊の「さっぽろ白石片倉鉄砲隊」として、古式銃発砲演武を「白石区ふるさとまつり」で披露している様子を紹介しています。

2021年から会の新たな事業として始めた小中学生の作文や詩、絵画などの創作活動を発表する冊子「児童・生徒創作広場白石テラス『ななかまど』」の創刊号も合冊されています。

『白石ものがたり4　諸行事の記録』は札幌白石2021年事業の全記録

『白石ものがたり4　諸行事の記録』は、札幌白石2021年事業の4年弱の活動内容を記録しています。新型コロナウイルス感染拡大により1年延期されての2021年12月に、感染対策を徹底して開かれた記念式典の様子を詳しく伝えています。秋元克広札幌市長のあいさつや札幌アイヌ協会の阿部一司会長のメッセージ、ノンフィクション作家

『諸行事の記録』に掲載された白石区ふるさとまつりで披露された地元組織・片倉鉄砲隊の演武の誌面。

札幌白石200年への布石に

今回の記録誌は、1000冊を発刊し、白石区内などの関係機関だけでなく、道内全179市町村にも各2冊が寄贈されています。集めた一次史料については、50年後の白石命名200年に向けた基礎資料、つまり地域の財産として引き継がれることを念頭に、検索しやすい独自の白石番号を割り当てた誌面データ、電子データで保存されていきます。

今後の白石区ふるさと会の活動について、武藤会長は、「さっぽろ白石片倉鉄砲隊にあっては、札幌市の無形文化財指定をもらえるよう活動させていきたい」と話し、全道各地の引き合いに対応可能な迫力ある演武を披露できるよう準備を進めるなど、より広域的な活動を展開していく考えを述べています。

山中部会長は「『ななかまど』について、年1回以上、末長く発行が続けられていくことを乞い願っています」と、今後も学校の協力を得ながら継続することに思いをはせています。

お問い合わせ先　白石ふるさと会事務局（白石区市民部総務企画課）
札幌市白石区南郷通1丁目南8－1
白石区複合庁舎4階
☎011－861－2405

ホベツアラキリュウ化石［むかわ町］

（文と写真・片山健一　取材日2022年3月4日）

博物館のエントランスホールに展示されている
ホベツアラキリュウの全身骨格（左）と
むかわ竜の実物大レリーフ（右）

国内2体目の首長竜、全身骨格化石
穂別博物館で
体長8㍍の復元模型を展示

首長竜のホベツアラキリュウ化石は1975年6月、化石愛好家の故・荒木新太郎さんが、旧穂別町（現・むかわ町穂別）長和地区で発見したものです。以来、ホベツアラキリュウは「ホッピー」の愛称で町民に親しまれ、むかわ町穂別博物館のエントランスホールでは全長8㍍の全身骨格復元模型が来館者を迎えています。

化石発見で博物館建設が決まる

荒木さんが見つけた化石は、首長竜のヒレであることが2年後の1977年2月、国立科学博物館研究員の指摘で判明しました。これを受けて、住民を中心に結成された発掘調査団が、発見場所の周辺で大掛かりな発掘作業を行い、全身骨格の約半分に当たる440点の化石を採集しました。

化石標本は3年半をかけてクリーニングされ、頭や首、尾を除いた胴体の大部分が確認されました。首長竜のまとまった骨格としては、1968年の福島県で見つかったフタバスズキリュウ以来、国内2例目となりました。

ホベツアラキリュウの左後足の実物

第一発見者の荒木さんの強い希望もあって、町は化石を展示・保存できる施設として町立博物館の建設を決定し、1982年の開館に合わせ、北海道では初となる首長竜の全身骨格をFRP（繊維強化プラスチック）で復元した模型も製作しました。

開館から10年を迎えた1992年には博物館の展示を刷新し、土器や郷土資料などは置かない、化石専門の博物館にリニューアルすると、年間の来館者は最高となる3万5000人を記録しました。

穂別博物館館長の櫻井和彦さんは「ここに博物館があることで、化石が町外に流出せずに集まってきます」と話し、収蔵庫に数千点の実物化石を保管し、毎日クリーニング作業が行われています。

2017年9月27日、ホベツアラキリュウ化石は道の天然記念物に指定されました。化石では1984年のタキカワカイギュウ化石標本以来2番目の指定で、化石そのものの学術的価値とともに、「ホッピー」を地域のシンボルにしたまちづくり活動も高い評価を受けたそうです。

化石のクリーニング作業

カムイサウルスはじめ貴重な化石が続々と

ホベツアラキリュウは、白亜紀後期に当たる約8300万～8100万年前の海に生息していたエラスモサウルス科の首長竜です。むかわ町穂別ではほかにも、たくさんのアンモナイトや、海生爬虫類のモササウルス、大型のウミガメ、イルカの祖先などの貴重な化石が発見されています。これらのことから山あいの町、穂別がかつて海の底だったことが分かります。

むかわ町最大の発見と言われるのが、2003年に採集された植物食恐竜ハドロサウルス科のカムイサウルス・ジャポニクス（通称・むかわ竜）の化石です。恐竜の全身骨格化石としては国内最大のもので、全身を構成する骨の数で約6割、体積で約8割が発掘されました。

海だった頃の地層から、陸上で生息していたむかわ竜の化石がまとまって出てきたのは、死後間もなく海底に沈んだためと考えられています。穂別博物館は「陸の恐竜と海の生物の化石が両方見られる珍しい博物館になりました。化石からこの地域の成り立ちと、生命の移り変わりを知ってもらえれば」と櫻井館長は言います。

むかわ町は、化石を中心に展示し、多くの来館者を集めてきた穂別博物館をさらに磨き上げようと、博物館の新館を建設し、むかわ竜の全身骨格復元模型とともに、同時代に生息していた肉食恐竜のティラノサウルスの全長12㍍に及ぶ骨格レプリカを展示する計画を持っています。

雪の中から顔を出す古代生物オブジェ。町の至る所に設置されている

むかわ町

海に面した鵡川町と山に囲まれた穂別町が2006年3月に合併し、誕生しました。「鵡川ししゃも」をはじめとする海産物、「穂別メロン」「むかわ和牛」などの農畜産物も豊富です。

道内における主な恐竜・化石展示施設の一覧地図（道庁のHPより）

北海道は「恐竜・化石大陸ほっかいどう」をキャッチフレーズに、道内発掘の恐竜・化石をPRし、地域活性化の取り組みを推進する活動を展開しています。

ほっかいどうの本

このコーナーは北海道の出版社から発行された本を社員が読み紹介しております。お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。特記以外は税込価格です。

消えた「四島返還」
安倍政権　日ロ交渉2800日を追う

北海道新聞社　編
A5判　312頁　1980円
北海道新聞社　発行
978-4-86721-038-3
011・210・5744

北海道の北東部、オホーツク海に連なる島々である歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島を総称して「北方領土」といいます。

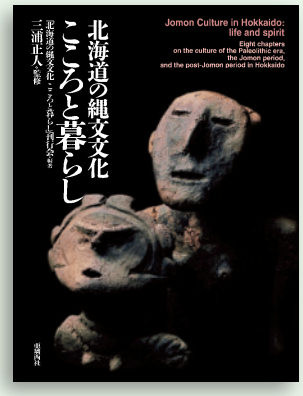
これらの島には領土問題があります。第二次世界大戦末期にソ連が日ソ中立条約に違反して対日参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後、北方領土に侵攻し現在までロシアが法的根拠なく占拠しています。戦後、日ロ間で話し合いが重ねられてきました。

本書は、2012年に発足した第二次安倍政権の2800日に及ぶ、日ロ交渉を追った渾身のルポルタージュです。2島先行返還への方針転換の経緯、日本政府の思惑や駆け引きなども詳述されています。プーチン大統領との27回の首脳会談により、日ロ間の歩み寄りが期待されましたが、返還されずに今日に至っています。

また、ロシアによるウクライナ侵攻への制裁を発動した日本に対し、ロシアは日ロ平和条約交渉の中断を宣言しました。一人ひとりがこの問題を正しく理解するための必読書と言えるでしょう。

（Mac部　木村一希）

北海道の縄文文化　こころと暮らし



「北海道の縄文文化　こころと暮らし」刊行会　編著
B5変型判　300頁　3960円
亜璃西社　発行
978-4-906740-50-5
011・221・5396

北海道・北東北の縄文遺跡群が2021年7月27日に世界遺産へ登録されました。

本書では縄文文化の大きな魅力の一つである縄文土器や遺構について、解説付きで楽しく読むことができます。まるで写真集のように出土品の写真が誌面に大きく掲載されているので、小さな石器や縄文土器の模様等が博物館で見るよりも、はっきりと細部まで確認することができます。

また、各種出土品の用途とともに縄文人の文化・風習が丁寧に記載されており、現地の研究員がわずかな出土品から様々なことを読み取る過程が大変興味深く、想像を掻き立てられる内容になっています。

以前この分野を研究されている大学教授にお会いした際、「世界遺産に登録されて終わりではない。これから地域の人に認知してもらって、根付かせていくことが本当に重要なこと」と話されたことを思い出しました。今回の縄文文化ブームを一過性にせず、本書を手に取って学び、奥深い縄文世界の浪漫に浸ってみませんか。

（北海道営業部　土田和史）

画文集　四季のきせき

プールストラ愛　著
B5変型判　132頁　2200円
共同文化社　発行
978-4-87739-363-2
011・251・8078

本書は、福岡県在住のプールストラ愛さんが、日常の自然の中にある四季の移ろいを、花や動植物の絵と文章で織りなした画文集です。月ごとに区切られているページ構成で、それぞれの月の季節に合わせた景色、植物、動物の美しい水彩画と、自然の中で感じたかけがえのないものを綴ったことばが収録されています。

『四季のきせき』の「きせき」という言葉には、「軌跡」と「奇跡」の両方の意味が込められています。この本を読んだことがきっかけで、何気ない四季の変化は当たり前のようで、実は小さな奇跡の連続により成り立っているのだ、と深く感じることができました。

「自然とともにある喜びを多くの人と分かち合いたい」と語る著者が、自然の中で感じた四季の「きせき」を堪能できます。

この本を読むことで優しく癒されることは勿論、皆さんのお住まいの地域でも花や動植物たちの変化に気づけるよう、ふと足を止めてみてはいかがでしょうか。

（技術広報部　石田萌子）

新刊情報

書名の下の数字は日本図書コード（ISBN）及び雑誌コード。特記以外は税込価格。お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。

お隣は外国人　北海道で働く、暮らす
978-4-86721-047-5
「お隣は外国人」編集委員会　編
A5判　144頁　1540円

新装版　北海道廃止ローカル線写真集　追憶の鉄路
978-4-86721-048-2
工藤　裕之　著
A5判　416頁　2750円

北海道コンサドーレ札幌　オフィシャルガイドブック2022
978-4-86721-056-7
北海道新聞社　編
A4判　120頁　1430円

報道写真集　スマイル！　カーリング女子日本代表
978-4-86721-059-8
北海道新聞社　編
A4判　48頁　1100円

北海道日本ハムファイターズ　オフィシャルガイドブック2022
978-4-86721-057-4
北海道日本ハムファイターズ　編
A4判　120頁　1100円

北海道発 Only One の家づくり vol.17　新築&リノベーション
978-4-86721-058-1
北海道新聞社営業局　編
A4判　214頁　1430円

カムイの生命　鼓動する野生
978-4-86721-055-0
山本　純一　著
A4判　96頁　3300円

道新プラス　北海道の病院2022
16747-03
北海道新聞社　編
B5判　306頁　880円

―北海道新聞社
060 8711 札幌市中央区大通西3-6
☎011・210・5744

北海道樹木図譜
978-4-8329-8236-9
斎藤　新一郎　著
B5判　694頁　22000円

非営利法人制度改革の研究
新・政策の窓モデルによる実証分析
978-4-8329-6879-0
小島　廣光・平本　健太　著
A5判　490頁　9350円

新版　捷水路
978-4-8329-8237-6
山口　甲・品川　守　著
A4判　358頁　16500円

北海道天然痘流行対策史
アイヌ民族と安政年間の種痘を中心に
978-4-8329-6878-3
永野　正宏　著
A5判　280頁　5940円

交差する日台戦後サブカルチャー史
978-4-8329-3414-6
押野　武志・吉田　司雄・陳　國偉・
涂　銘宏　編著
四六判　360頁　3300円

―北海道大学出版会
060 0809 札幌市北区北9条西8丁目
☎011・747・2308

22-23　北海道キャンプ場ガイド
978-4-906740-51-2
亜璃西社　編著
四六判　352頁　1430円

―亜璃西社
060 8637 札幌市中央区南2条西5丁目
☎011・221・5396

介護員詩誌　悩み人解説
978-4-89115-407-3
北岡　けんいち　著
四六判　287頁　1100円

社会人として学んでほしい
中間管理職の「下座学」
978-4-89115-409-7
石塚　正宏　著
四六判　151頁　1320円

増補改訂版
続アイヌモシリ・北海道の民衆史
人権回復を目指した碑を訪ねる
978-4-89115-408-0
杉山　四郎　著
A5判　213頁　1650円

―中西出版
007 0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
☎011・785・0737

「銀河鉄道の夜」の謎を解く　〈彼ら〉はいったい何者なのか
978-4-909281-41-8
三浦　幸司　著
四六判　184頁　1980円

―寿郎社
060 0807 札幌市北区北7条西2丁目
☎011・708・8565

三浦綾子論　その現代的意義
978-4-434-30154-4
小田島　本有　著
四六判　294頁　1980円

―柏艪舎
060 0002 札幌市中央区北2条西3丁目
☎011・219・1211

石狩川を見にいって
978-4-8328-2203-0
松田　扶美　著
A5判　127頁　1760円

十勝のアイヌ民族
その歴史的経緯を「市町村史」などにより探る
978-4-8328-2201-6
加藤　公夫　編
四六判　479頁　3520円

―北海道出版企画センター
001 0018 札幌市北区北18条西6丁目2-47
☎011・737・1755

北海道の児童文学・文化史
978-4-87739-362-5
日本児童文学学会北海道支部　編著
A5判　496頁　3850円

爪句@今日の一枚　――2021
北海道豆本シリーズ50
978-4-87739-365-6
青木　曲直　著
100ミリ×74ミリ　232頁　500円

無学日記
978-4-87739-364-9
池田　福重　著／喜山　康三・安渓
遊地・岩下　明裕　著作代行
B5判　132頁　2200円

画文集　四季のきせき
978-4-87739-363-2
プールストラ愛　著
B5変型版　132頁　2200円

旅人類　Vol.8
978-4-87739-367-0
吉田　類　編
B5判　144頁　1100円

―共同文化社
060 0033 札幌市中央区北3条東5丁目
☎011・251・8078

表紙のことば

雄冬（おふゆ）の群来（くき）

櫻井　守
木版画　35㌢×48㌢

早春のころ海水が乳白色に染まる。産卵のためニシンが沿岸に寄せてくる群来である。北海道のニシンは江戸時代から魚粕（肥料）として本州の菜種や綿花の栽培を支えてきたが、明治末頃をピークに昭和30年代にはほぼ消滅した。近年、石狩湾各地で群来の復活が見られるが、これが本格的な資源回復になることを期待したい。

雄冬は国道の通年供用が可能となった30年前までは、増毛（ましけ）からの連絡船が主要な交通手段であり、知床と並んで最後の秘境といわれた集落である。

GEM木版画会　会員　札幌市在住

※季刊アイワードのバックナンバーを
弊社ホームページよりご覧いただけます。
URL　https://iword.co.jp